

臨床栄養管理法における進歩と、医療従事者の教育

日本静脈経腸栄養学会理事長
近畿大学医学部長

大柳 治正

20世紀後半より始まった近代的な臨床栄養管理法は、代謝・栄養学の進歩、種々の栄養剤の開発・機器の改良等により、飛躍的な発展をとげ、もっとも基本的な治療手段の一つとして確立されてきた。臨床栄養法は、静脈栄養法、経腸栄養法ともそれぞれの特徴がほぼ明らかになり、適応症も大部分のコンセンサスは得られる迄になり、将来に向けて機能食品、個人の病態分子生物学的背景にそった栄養管理まで検討しようという段階に来ている。しかし、栄養療法に関する International Guideline 検討委員会が設立されたように、まだ適応症、投与カロリー量、最適な投与栄養組成等、不詳な点も多いのが現状である。

今回は臨床栄養管理法に関しては、投与カロリー量免疫賦活栄養管理法の現状と問題点を概説する。また医療従事者の教育に関しては低栄養と予後、栄養アセスメントの重要性とともに日本静脈経腸栄養学会が取り組んでいる、教育システムと医療環境の整備等についても併せて述べる。